

図 画 工 作 科

清 水 英理子
山 崎 葉 月

はじめに

前年度は、「自己を拓く」の研究主題のもとで図画工作科におけるめざす子ども像を「自分の見方や感じ方、考え方をもとにして創意工夫しながら造形的な創造活動ができる子」と設定し、「生きて働く力」のとらえや「主体者としてかかわる学習」の学びの姿を明らかにしてきた。その結果「生きて働く力」を「感じ取る力」と「造形的な知識や技能」の両面から育てていくことを確認し、いくつかの実践を試みてきた。学習に際して子ども達は、積極的に対象に働きかけ、自分なりに感じ取り考えたりする姿勢を身につけてきた。しかし、造形的な知識や技能においては不十分さが残り、子ども達が本当に分かった出来たとは言えず、それを他の単位でも自分なりに生かす力にまでは至っていなかった。

そこで、本年度は、教科の本質から「生きて働く力」を見直し、子ども達に図画工作科でどのような力こそが 필요한のかを再吟味することにした。また、獲得—再構成—適用の三段階を経た「主体者としてかかわる学習」の実践を重ね、単位を通して子ども達の意識を大切にしたい学習の成立をめざして研究を深めることにした。このことにより、子ども達は、自分自身で決定しやり遂げ、本当に分かった出来たと言える造形的表現活動の喜びを味わうことができ、自分にとって新しい造形的な価値を見出し、自己の可能性を拓くことが出来ると考えた。



I 生きて働く力のとらえ

1 図画工作の本質について

わたし達は図画工作科の本質を、教科の独自性から考えてみることにした。

図画工作科の独自性は、対象とのかかわりや材料となる物を通して自己表現していくところにあると考える。授業の中では、子ども達が対象となる「自然」「人」「物」「心」とのかかわりを通して、自分が感じたことや考えたことを、材料の具体的な形や色、材料を組み合わせることで表現していくことになる。図画工作科では対象とのかかわり方客観的になされるのではなく、自分自身に合わせてそれぞれの対象を取り入れることができる。また、紙や粘土、木などのさまざまな材料に対するかかわり方についても同じである。子ども達は、対象や材料に自ら働きかけ、試行錯誤しながら自分にとって価値あるものをつくり出していく。これは、図画工作科の授業で子ども達が、対象や材料のかかわりを通して決定権が自分自身にあり、それぞれの場で自己表現がなされることを意味している。

このような、教科の独自性から子ども達に培われていくものには、次のようなものが考えらる。

その一つは、造形的な創造性である。創造とは単に無から有を生むことではなく、過去の経験や学習で身についたさまざまな知識や技能、感覚を組み合わせる新しいものをつくり出そうとする能力のことである。図画工作科の学習においても、子ども達は、対象から感じたことや思ったことを具体的な表現に結びつけるために、過去の経験や学習から得たものを駆使し、さまざまな材料を操作しながら自分にとって価値あるものを見出すことができる。このように、自ら感じ考えたことを自らの方法でやり遂げることができる図画工作科では、子ども達にとって表現活動の喜びを味わうとともに創造的な態度や関心が培われ、造形的な創造性を養うことになる。

もう一つは、豊かな心や豊かな情操である。子ども達が、自ら対象となる「自然」「人」「物」「心」にかかわることでそれらの本質やよさ、美しさや優しさなどを深く感じ取る力を育んでいく。このことはすべての人間に必要な最も人間らしい豊かな感情、感性、情緒などを養うことであり、豊かな心や豊かな情操として人間性の育成におおきくかかわっている。

以上のことから、図画工作科の本質を次のようにとらえた。

図画工作科の本質

対象や材料とのかかわりを通して 造形的な表現活動の喜びを味わわせ 豊かな心と創造性を育てる

2 図画工作科における生きて働く力

前年度より引き続き研究がなされている、図画工作科における「生きて働く力」は、上記のような教科の本質をめざして、子ども達に身につけさせたいものである。そして、子ども達が本当にわかった出来たと言え、造形的な表現活動の喜びを味わうために必要な力のことであったと考えた。

図画工作科では「生きて働く力」を

感じ取る力をもとに 自分にとって価値ある造形的な表現活動ができるための知識や技能

と設定した。

図画工作科の本質で述べたように、造形活動は「自然」「人」「物」「心」などさまざまな対象との出会いから始まり、それらをどう感じ取りどうかかわっていくかが後の造形活動の基盤となる。それで、生きて働く力としてまず「感じ取る力」を身に付けさせたいと考えた。ここでの感じ取る力には、対象になるものへの興味や関心、全感覚を働かせて対象をとらえる感受性、見たり触れたりして感じ取る直感力などが挙げられる。そして、その感じ取る力が子ども達の想像力や発想力を豊かにし、後の対象へのかかわりをより活発にしていこうと思える。

しかし、子ども達が「感じ取る力」を身に付けたとしても、それを具体的に表現する方法がわかり、出来なければ造形的な表現活動が成されたとは言えない。そこで次に、生きて働く力として「自分にとって価値ある造形的な表現活動ができるための知識や技能」を身に付けさせることにした。この造形的な表現活動ができるための知識や技能とは、もちろん作品の出来ばえを追求するためのものではない。それは、図画工作科の本質でも述べたようにさまざまな対象や材料とのかかわりを通して、自分にとって今までにない新しい見方考え方感じ方を学び、造形的表現活動の幅を広げていくような知識や技能として捉えられる。このことから、単なる造形的表現活動ができるための知識や技能ではなく「自分にとって価値ある造形的な表現活動ができるための知識や技能」として生きて働く力に位置づけた。

また、このような生きて働く力は、対象との出会いから造形的な表現活動ができるまでの一連の学習活動を通して、総合的に身につけられていくものである。

3 単元の生きて働く力を設定するために

次に、単元（題材）の生きて働く力を設定するために、各領域でどのような生きて働く力が考えられるかを明らかにしてみた。

前述した図画工作科の本質や生きて働く力をともに、領域での生きて働く力を以下のように観点で設定した。

- ・対象や材料とのかかわりがわかるもの
- ・造形的な価値を含むもの
- ・自分なりの感じ方や考え方が生かされるもの

各領域における生きて働く力

『造形あそび』

- ・対象になるものを感覚的にとらえ 思いついたままに造形的に表現活動できる

『心象表現（絵・立体）』

- ・対象から感じたことや思ったことを イメージ豊かに造形的に表現できる

『適用表現（デザイン・工作）』

- ・材料を生かして考えたことを 目的に合わせて造形的に表現できる

『鑑賞』

- ・対象や作品を自分なりの見方感じ方で味わい造形的表現活動に活かすことができる

このような領域での生きて働く力をともに、それぞれの単元（題材）での生きて働く力を具体的に設定していくことになる。実践例を用いて、適用表現領域の一単元における生きて働く力の内容や設定について述べてみる。

3年 ―― 宇宙探検に出かけよう ――

（適用表現）

この題材の主な内容は、子ども達が「宇宙探検に出かけよう」という意識のもとで先ず宇宙服を作り、次に身边材（主に容器類）で宇宙船を作るものである。学習活動の中心は、宇宙船作りであり、自分で宇宙探検にいくために乗ってみたい宇宙船を想像し、イメージに合うような宇宙船を身近な材料を使って造形的に表現することである。この題材は、材料を生かして自分のイメージに合

うような宇宙船をつくる目的があり、適用表現領域とした。

適用表現領域の生きて働く力をふまえて、本題材での生きて働く力を次のように設定した。

―― 本題材（単元）の生きて働く力 ――

自分の宇宙船のイメージに合うように 身边材の原形にとらわれることなく 新しい形を作り出し組み合わせることができる



低学年で子ども達は、身のまわりにある身边材を組み合わせて何かに見立てることができる。そこで中学年では、操作活動をさらに取り入れ自分のイメージに合うように身边材のものの形を変える方法を知り、さまざまな立体を作り出すことが出来る力を身に付けること

にした。このような力により子ども達は幅広い立体の形を認識することができると考えた。具体的には操作しやすい容器類に切り込みを入れ、折ったり曲げたり開いたりしながら自分のイメージに合う新しい形を作り出し組み立てていくことである。このような造形的表現活動では、操作活動の高まりとともに自分のイメージも変化し高められる場合がある。

Ⅱ 三段階の構成について

1 要素のとらえ

生きて働く力を構造でとらえた時、いくつかの要素群に区別されることは全体論でも述べられている。図画工作科における要素や要素群を次のように考えた。

図画工作科の要素とは、自分にとって価値ある造形的な表現活動ができるための具体的な知識や技能のことである。

要素A群——これまでの造形的な見方考え方感じ方で獲得できるものであるが、子ども達の力だけで意味づけて理解できるものと、多少の教師の働きかけによって意味づけ理解できるものがある。

要素B群——これまでの造形的な見方考え方感じ方では意味づけて理解できないものであり、教師からの働きかけにより、新たな価値ある造形的な見方考え方感じ方で意味づけて理解できるものである。

これらの要素群について前述した実践例、「宇宙探索に出かけよう」から具体的に述べてみることにする。

子ども達は2年生の時に、身近材を組み合わせ自分の想像したものをつくった経験がある。その時の操作活動は身近材の原形をそのまま生かしたものである。そこで今回は、それらの学習経験をもとに宇宙船を身近材で作ることになる。授業は宇宙探検に出かけようという意識で成され、子ども達は想像力を働かせ宇宙船のイメージをもつであろう。しかし、子ども達の操作活動は、従来のように身近材を原形のまま組み合わせることが多く、形を変えるにしても部分的に切ったり曲げたりするだけのものである。

要素A——身近材の原形を生かしたまま部分的に形を変えることができる。

ここでは、既習の学習からそれぞれの材料の原形が基本的に生かされたままであり、子ども達による形の変化はあまりない。

要素B——切る、折る、曲げるなどの操作活動をしながら原形にとわられることなく、新しい形を作り出すことができる。

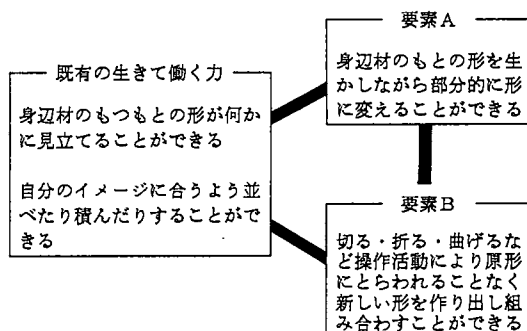
教師の働きかけにより、もとの形を変える具体的方法（切り込みの入れ方や折り曲げ方）を提示し、随分違った形ができることに気付かせる。ここでは、もとの形にとわられることなく新たな造形的見方感じ方ができ、造形活動の幅が広がってくる。

2 要素のネットワーク

獲得段階で子ども達は、身近材のもとの形の一部分を変えて、自分の宇宙船のイメージに近づけようとする。要素A——もとの形を生かしながら部分的に形を変えることができる——は教師からの働きかけがなくても子どもたちが獲得し表現できることである。

再構成段階では、自分のイメージにさらに近づけるために要素B——切る、折る、開く、つぶすなどの操作活動をしながら原形にとわられることなく、新しい形をつくりだし組み合わせることができる——を教師からの働きかけによって身につけられる。そして、要素Aや要素Bそして既存の生きて働く力がネットワークされ、本題材の生きて働く力——自分の宇宙船のイメージに合うように、身近材の原形にとわられることなく、新しい形を作り出し組み合わせることができる——が身に付いてくる。それを図式化すると次のようになる。

〔再構成段階におけるネットワーク図〕



また、子ども達の「わかり」の面から述べてみると、獲得段階の子ども達は、今までの造形的な見方考え方感じ方をもとにして、表現される。ここでは今までの捉え方と大差なく、子ども達にとって新しい造形的価値を見出すものではない。次の再構成段階では教師からの働きかけにより、要素Bを獲得するが、今までの造形的な見方考え方感じ方では意味づけできず、新たな捉え方が必要となる。この新たな見方考え方感じ方で意味づけできた時、新しい造形的価値を見出し本当に「わかった」と言える。

Ⅲ「主体者としてかわる学習」を目指して

4年 「強く心に残っていること」

—自分が感じたこと、思ったことを

版画に表現する—

1 単元の構成について

(1) 単元での生きて働く力

わたし達は、図画工作科の一領域である「心象表現（絵・立体）」の生きて働く力を、「対象から感じたことや思ったことを、イメージ豊かに造形的に表現できる」と、とらえた。これをうけて「心象表現」の一つである版画における生きて働く力を設定するにあたり、次のように考えた。

中学年は、見たものを正しく描く技能面が伸びて写実的な表現の絵が多くなる。例えば、見える人物すべてを同じ大きさでならべ、写真のような絵を描いたりする。そのような表現では、「力強さ」や「動き」の乏しい絵になる。そのため中学年からの絵が、低学年のそれと比べて、「自分の思い」すなわち自分の感じたこと、思ったことが表現されていない場合が多い。子ども達は、もっと自分の思うように描きたいと考えているはずであろうが、自分の思いが観る者に伝わってこないのである。

そこで、写実的な技能が伸びるこの時期の子ども達にこそ、自分の思いを表現する知識、技能を採らせる必要があると考えた。その知識、技能とは「力強さ」や「動き」を追求するものであり、言い換えれば、自分の思いをイメージ豊かに表現するためのものである。

自分の思いを表現するにも色々の方法があるが今回は版画で試みた。版画の製作過程を大きく分けると、下絵、墨入れ、彫り、刷りの四段階がある。この四段階のうち、下絵、彫りは、特に重要である。なぜならば版画においては、白黒の単純な色彩を生かすために、下絵の工夫が必要だからである。絵であれば色彩の工夫によって自分の思いを強めることもできるであろうが、版画ではそれができないからこそ、下絵の工夫が一層重要になると考えたのである。ここでの下絵の工夫とは、次の三

点である。①主となるものとまわりの組み合わせ方、配置。②画面に入るそれぞれの大きさ。③人物の表現の仕方。

以上のことから、本題材での生きて働く力を次のように設定した。

運動会での感動を自分を中心に 力強く
動きのある版画に表現できる

(2) 生きて働く力の要素とネットワーク

これまでに子ども達は、三年生で木版画をやっている。そこで、既存の生きて働く力と考えられるものには次の二点が挙げられる。①画面にふさわしい大きさで下絵を描くことができる。②三角刀、丸刀、平刀などの彫刻刀の使い方や、彫り後の違いが分かる。

子ども達にとって、木版画で人物を表現するのは初めての経験であるが、下絵については今までの方考え方感じ方を生かすことができる。しかし、単元での生きて働く力でも述べたように、自分の思いをより強く表現するために、「動き」や「力強さ」の追求が必要である。

この「動き」を出すために、下絵に「ななめ」を取り入れることを生きて働く力の要素とした。「ななめ」は、子ども達が今までで無意識のうちに使ってきた表現方法であり、教師の働きかけ（トレーニング）によって意味付けられやすい知識、技能であると考え、要素Aになる。

要素A [ななめ]

・基底線や人物をななめにして動きのある画面を作る。



「力強さ」を表現するためには、「自分を目立たせる」と「彫りの方向」を要素とした。「自分を目立たせる」という要素は、現実には見えないもの

を意識して描く経験が今までなかった子ども達には難しいと考えられる。そこで、教師の働きかけが必要な要素Bになる。

要素B 1 [自分を目立たせる]

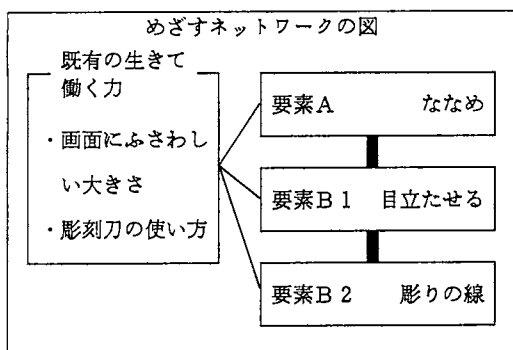
- ・自分とまわりより大きく描く。
- ・力が入る部分（手、腕、足）を太く、詳しく描く。

また、「彫りの方向」については、刃の特徴を生かした彫りはできると考えられる。しかし、彫りの方向を工夫することで、力が入った体の動きや手足のふくらみを表現することには気づかないと考えられ、要素Bとなる。

要素B 2 「彫りの方向」

- ・力が入った体の動きや手足のふくらみが出るように彫る。

ネットワークの図は次のようになる。



生きて働く力は、これらの要素によってネットワークされる。要素Aに気付いた下絵には、「動き」が出て来るが、力強さは足りない。したがって「力強さ」を追求する要素Bが必要となるのである。

(3) 主体者としてかかわらせるために

本題材において、子ども達は自分の思いを表現するための知識・技能を技術をして学び、それにあてはめて描くのではない。そこで、主体者とかかわらせる学びの姿を次のように設定した。「力強く、動きのある版画にするため、工夫し、根気よく修正していく姿。」

教師の働きかけは、以下の三点がおげられる。

①トリミング②OHPでの下絵の提示③彫りの工夫がされてある作品の提示。要素Aを身に付けさせる働きかけとしては描いたものを「トリミング」させたい。「トリミング」とは、描いた人物を切り取り、画面上で動かしてみることである。要素Bを身に付けさせるためには、②③の働きかけをしたい。②では、腕、足が太く描かれている作品とそうでない作品を比べさせ、効果に気付かせる。気付いた後、自分の下絵を修正する時は、綱を握らせたり、鏡を見せたりと部分練習をさせたい。

(4) 単元計画（総時数12時限）

	児 童 の 主 な 意 識 の 流 れ	要素と働きかけの位置づけ
獲得3	<p><題材を決めよう。></p> <ul style="list-style-type: none"> ・個人走・表現運動・小綱引き <p><様子を表す題材を決めよう。></p> <p>例・ぼくは、個人走でチーターのように猛スピードで走った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・わたしは、小綱引きで手に前ができるほど引っ張った。 <p><自分（主体）の動きを描いてみよう。></p> <ul style="list-style-type: none"> ・画面にふさわしい大ききで描かなければならないな。 ・腕や足の関節に注意して描かなければならないな。 ・顔の表情も大切だな。 <p><画面に動きを出すためには自分をどのような向きに置いたらよいか></p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分をななめに置いたら風をきって走っているように見える。 ・綱をななめに置いたら動きが出てきた。 <p>ななめを入れると動きのある生き生きとした画面ができる。</p>	<p>要素A ななめ</p> <p>働きかけ1 トリミング</p>

再 構 成 7 適 用 2	<ul style="list-style-type: none"> ・まわりの人物を描いてみよう。 ・背景はどうしようかな。 ・まだ、力強さが足りないな。 <p>〈下絵に力強さを出すにはどうしたらよいかな。〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・筋肉を盛り上げる。 ・力を入れている部分（手、足）がはっきり分かるように大きく詳しく描く。 <div>力が入る部分、動かしている部分を目立たせると力強い下絵になる。</div>	<div>要素1 目立たせる</div> <div>働きかけ2 OHPで作品を展示する</div>
	<p>〈下絵を完成させ版木に転写し、刷り上がりを見通しを立て、白黒を決めて墨入れをしよう。〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・黒のかたまりを多くすると力強い感じがする。 ・白黒を逆にすると印象が違ってくる。 ・墨入れをしたら下絵がはっきりして彫りのイメージができてきた。 <p>〈彫りの線の方向によってもっと力強く、生き生きした下絵にすることはできないだろうか。〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・空気の動きも線の方向で表すことができる。 ・彫りの線によって、手足のふくらみ、力の入っている体の部分が表せる。 <div>主体のまわりを囲むようにして彫ると、力強さや動きが出てくることがわかった。</div> <p>〈お弁当箱を彫ってみよう。（ためし彫り）〉</p> <p>〈彫りの線の方向を考えて彫ってみよう〉</p>	<div>要素B 主体のまわりの彫りの方向</div> <div>働きかけ3 試し彫りの後 作品を提示する</div>
	<p>〈版画のカレンダーを作ろう〉</p> <p>〈友達作品を鑑賞しよう〉</p>	

2 単元の実践と考察

(1) 授業の実践

〈題材を決めよう〉（獲得の1時）

自分の姿をイメージし、文章で書く。例「手にまめができるほど引っぱった綱引き」

〈自分の働きを描いてみよう〉（獲得の2時）

イメージをもとに、自分を描く。この時、具体的に頭の大きさを指定すると良かった。

〈画面に動きを出すためには、自分をどのように置いたらよいかな〉（獲得の3時）

トリミング（自分を切り取り、画面の中に動きが出るように置いてみる）をさせた。

〈力強い下絵にするにはどうしたらよいかな〉
（再構成の1時）

自分の位置が決まったので、まわりの人物を描かせた。ここで、要素B1「自分を目立たせる」ため、どのような工夫をしたらよいかを話し合った。子ども達からは、まわりの人物を自分より小さくすればよいという意見が出た。しかし、腕、

足を太くすることは出なかったので、獲得段階でイメージした自分の姿に振り返らせ「もっと力強い下絵にしよう。」と、問いかけた。そこで、OHPで力強さのあまり表現されていない腕、足と反対に力強さの出ている腕、足を比較して考えさせた。

〈彫りの線の方向によって力強く、動きのある版画にしよう〉（再構成の3時）

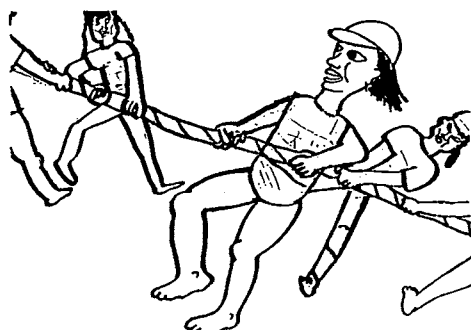
彫の段階では、まず彫りの練習から始めた。

三年生の時経験しているとはいえ、まだまだ経験が浅い。そこで、一辺10センチの正方形を弁当箱に見立て、ご飯粒を彫らせた。ご飯粒は長さ1センチ以下である。まばらに彫っては弁当箱の中にぎっしりつまっているご飯粒に見えないので、どの児童も一生懸命である、要素B2はこの練習の後、作品を提示して彫りの線の効果について話し合わせた。

(2) 考察

全体論の評価の観点③「各時間毎、単元を通して連続する意識が見られたか。」について、要素Aと要素B1から述べたい。

獲得段階では、トミーニングによって、要素A「ななめ」を意味づけることができた。子ども達は、切り取った自分をななめにすると、本当に走って見えること、綱を引いている人をななめにすると、本当に引いているように見えることなどを発見して驚いていた。この段階では、子ども達は連続した意識、すなわち動きのある下絵になるように工夫していた。図は「ななめ」を下絵に取り入れたM子の下絵である。

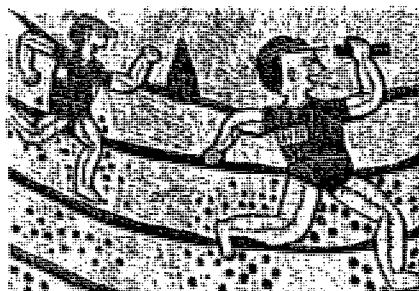


しかし、再構成段階の、要素B1「自分を目立たせる」ことにおいては、教師の働きかけの後の修正に大きな変化がみられない子どももいた。特に綱を持っている手や握りこぶしがうまく描けないのである。

そこで、実際に綱を持たせたりして、手足の部分描写をさせた。また、実際の大きさとらわれて小さく描いてしまう子どももいたので、意識を変える必要があると感じた。実物通り（写實的に描こうとする子ども達に、「絵は現実には見えないもの、実物通りでなくても表現することができる。」ことを教えると大きく、太く描き力強い下絵が出来てきた。しかし、それでも修正出来ない子どもも何人かいた。その理由として、子ども達が一度描いたものを、何度も修正して粘り強く仕上げる経験に乏しかったことが考えられる。したがって、今後の課題として、「自分を目立たせる」要素を、子ども達が抵抗なく身に付けられる働き

かけを考えていく必要がある。

以下はM子とK男の作品である。



おわりに

本年度の研究の成果は、以下のことである。

- ・図画工作科の「生きて働く力」を教科の本質から見直し、その内容やとらえの再吟味ができた。
- ・領域での生きて働く力を具体的に設定することができた。
- ・獲得一再構成一適用の三段階を通して、子ども達の意識の連続を重視するため、教師の働きかけの工夫がなされ、その結果、単元全体に子ども達の主体的な学びの姿を見ることができた。また、来年度の課題として
- ・より吟味された単元での「生きて働く力」を設定し、実践を重ねて確かなものにしていく。
- ・適用段階の実践も含めて「主体者としてかわる学習」のあり方をさらに追求し、三段階を経た学習の効果を実践を通して明らかにしていく。などが挙げられる。今後も図画工作科で「何を」「どのように」子ども達に身に付けさせるべきかの研究を実践し、実のあるものしていきたい。